中部地区の手仕事

宇都宮市教育委員会

文化財シリーズ第3号

宇都宮の手仕事

昭和55年 3 月

宇都宮市教育委員会

序　　文

私たちの郷土「宇都宮」には、先人がつくり出し、その技術を受け継いできた手仕事が数多くありました。

しかし、手仕事によって作り出された製品の多くは、近年の生活様式の変化によって減少の一途をたどっております。

これにともなって手仕事の技術保持者も激減しておりますが、最近の、郷土を見つめる風潮や下野手仕事会の活動などによって、再び手づくり製品及び手仕事そのものへの関心が高まってきました。

当教育委員会では、昭和53年度「伝統的技術（手仕事）保持者調査」を実施しました。

今回、刊行することになりました「宇都宮の手仕事」は、この調査報告の一部です。

私たちの郷土「宇都宮」を、より深く理解するための一助に本冊子が役立つならば幸いに存じます。

終わりに、本冊子の監修にあたってくださいました県立郷土資料館長の尾島利雄氏、調査・編集を引き受けてくださった本市文化財調査員各位並びに調査に御協力いただきました関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和５５年３月

宇都宮市教育委員会

教育長　後藤一雄

目　　次

序　　文　宇都宮市教育委員会教育長 ―― 後藤一雄
監修者のことば　栃木県立郷土資料館長 ―― 尾島利雄
まえがき ―― 5
1．太鼓作り ―― 7
2．黄(き)ぶな作り ―― 13
3．刀剣拵(こしら)え ―― 15
4．座敷箒(ほうき)作り ―― 20
5．藁(わら)細工 ―― 24
6．ふくべ細工 ―― 27
7．竹細工 ―― 30
8．かき紋 ―― 33
あとがき ―― 36

文化財愛護シンボルマークについて

このマークは文化財愛護運動の一環として昭和41年5月に定められたもので、ひろげた両方の手のひらのパターンによって日本建築の重要な要素である斗供のイメージを表わし、これを3つ重ねることにより文化財という民族の遺産を過去・現在・未来へと永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

監修者のことば

「宇都宮の手仕事」の発刊をよろこぶ

栃木県立郷土資料館長　尾島利雄

私が宇都宮市教育委員会から市内の手仕事の調査について相談されたのは、昭和５２年のことだったと記憶している。

当時、私の館でも伝統的手仕事の保存と伝承に資するため、昭和５０年・５１年度の２ヵ年かけて県下の手仕事の調査を行ない、この結果を「栃木県の手仕事」という報告書にまとめ公刊していたし、私自身手仕事の中に職人の美しいまごころがあることと、手仕事の調査を通して名もなく貧しく美しく生きた一般庶民の生活誌を解明することの重要性を認識していた。

また、栃木県下の手仕事師の集まりである下野手仕事会（大畑力三会長、会員60名）の結成に東奔西走した経験があるので、この宇都宮市教育委員会の企画はまことに時期を得たすばらしいものだと思い、いろいろと助言したもので、このことが縁となり、今日「宇都宮の手仕事」発刊に当って、監修の労をとることになった。

この報告書は、市内に現存する伝統的手仕事である太鼓づくり、フクベ細工、ホウキづくり、日本刀のこしらえ、竹細工、手描き紋、竹細工、郷土玩具として知られる黄鮒づくりにスポットをあてたもので、今までのこの種の報告書のからを破り、写真で説明するスタイルをとったところに特色があるものである。

本書にもられた内容はどれもこれも貴重なものであるが、中でも太鼓づくりや黄鮒づくりなどは、民俗研究者としての私たちの興味をひくところである。

近年、生活の近代化・都市化、すべての生産のオートメーション化によって、郷土に息づいている伝統的手仕事の中には、需要減や後継者不足で消え去ろうとしているものもかなりの数見られるのは極めて残念なことであるが、こうした時こそ、この種の報告書が必要であるような気がする。

本書を多くの方々が一読し、郷土のほこりである伝統的手仕事について深い理解と関心を示し、これが手仕事の保存と伝承に協力していただけるなら、監修者としてこれにすぎるよろこびはない。

ま　え　が　き

本冊子は、昭和53年度、宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した「伝統的技術（手仕事）保持者調査」の結果をまとめたものです。

調査の結果、報告された技術保持者は、18種29人であったが、編集にあたっては、技術が伝統的なものであるか、作品が宇都宮を代表するものであるか、製作過程の大半が手仕事で行われているかの３つの観点から検討し、原則として観点の２つ以上満すと考えられるもののうち、ここでは８種の手仕事について収録しました。

本冊子を編集するにあたっては、監修を県立郷土資料館長の尾島利雄氏にお願いしました。

実際の編集に関する仕事は、調査も担当した下記の市文化財調査員のうち※印の各位と市教育委員会社会教育課の職員があたりました。

●監　修

尾　島　利　雄（栃木県立郷土資料館長・下野手仕事会顧問）

●宇都宮市文化財保護審議委員会委員

小　林　友　雄（委員長）
辰　巳　四　郎（委　員）
福　島　悠　峰（　〃　）
森　谷　　憲（　〃　）
谷田部　康　幸（　〃　）
野　中　退　蔵（副委員長）
岩　崎　良　能（委　員）
雨　宮　義　人（　〃　）
塙　　静　夫（　〃　）
冨　　祐　次（　〃　）

●宇都宮市文化財調査員

※黒　川　孝　三（一　条）
加　藤　康　照（　旭　）
石　川　秀　男（陽　西）
松　本　文一郎（陽　東）
菊　地　正　仁（平　石）
直　井　茂　吉（清　原）
※坂　寄　悦　男（瑞穂野）
半　田　　勝（国　本）
福　田　　操（富　屋）
松　本　笑　悦（姿　川）
塚　田　賢　照（陽　北）
内　藤　二　郎（陽　南）
釜　井　宗　一（星が丘）
※平　塚　良　雄（泉が丘）
※粂　川　弘　明（宮の原）
増　渕　藤四郎（横　川）
小　堀　時　蔵（豊　郷）
高　山　伝　治（城　山）
※阿久津　義　正（篠　井）
寺　内　弥三郎（雀　宮）

〔※印は編集員、（　）内は担当区域〕

●宇都宮市教育委員会社会教育課職員

◎半田　昭（社会教育課長）　河越昌司（文化振興係長）
○定岡明義（文化振興係）　桜井敬朔（文化振興係）
渡辺　卓（　〃　）

〔◎印は編集責任者、○印は編集主任〕

●技術保持者一覧

番号	手仕事名	技術保持者		掲載頁
		氏名	住所	
1	太鼓	※ 小野崎武司 ※ 小野崎博一	泉町6－22 〃	7
2	黄ぶな	※ 浅川仁太郎 浅川俊夫	西原2－3－6 〃	13
3	刀剣拵え	※ 鷺谷義忠 ※ 鷺谷政信	伝馬町4－28 〃	15
4	座敷箒	※ 坂本泰次 坂本久四郎 坂本アイ子 阿部鼎次郎 佐藤行雄 梅沢喜夫 池田シゲ	桜5－4－17 〃 〃 下荒針町3581 上欠町677 下栗町2311 針ヶ谷町528	20
5	藁細工	※ 五十嵐一佐	瓦谷町637	24
6	ふくべ細工	※ 岡田三代造 福田太郎 ※ 小川昌信 小森明	簗瀬町513 大通り3－4－10 〃 2－4－8 〃 3－2－3	27
7	竹細工	※ 斉木正一郎 斉木薫 見目圭章 小堀金重	東塙田1－1－9 〃 今泉町820 関堀町363	30
8	かき紋	※ 日下田席蔵	西1－2－3	33

〔※印は写真撮影に御協力いただいた方々です。〕

1．太 鼓 作 り

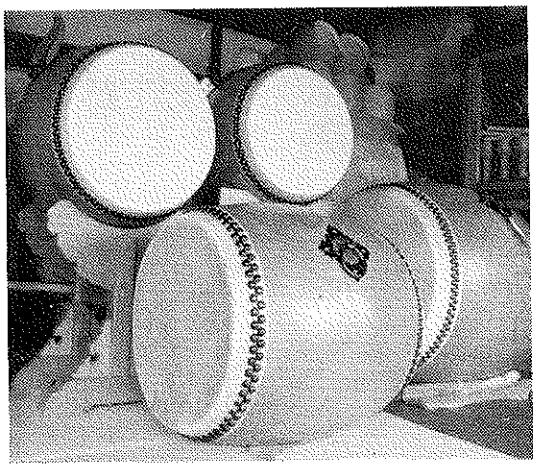
1．技術保持者　氏　　名　小野崎　武　司　　小野崎　博　一
　　住　　所　泉町６－２２　　同左
　　生年月日　昭和７年１月28日　　昭和30年10月16日

2．概　　要　技術保持者、小野崎武司氏は、太鼓師として４代目にあたり、各種の日本太鼓（長胴太鼓・小太鼓・平太鼓・つけ太鼓・うちわ太鼓・つづみ等）を製作している。

現在、太鼓師は、全国に数人しかおらず、製品は日本各地に納められている。

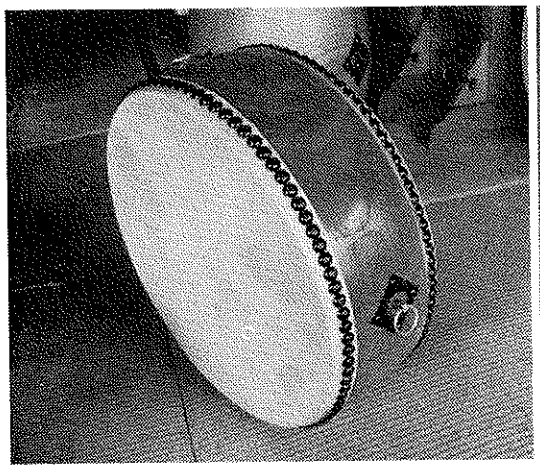
なお、小野崎博一氏は、武司氏の子息である。

3．作　　品

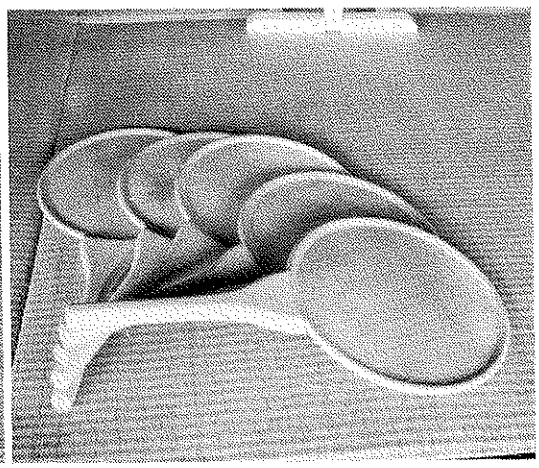


長　胴　太　鼓

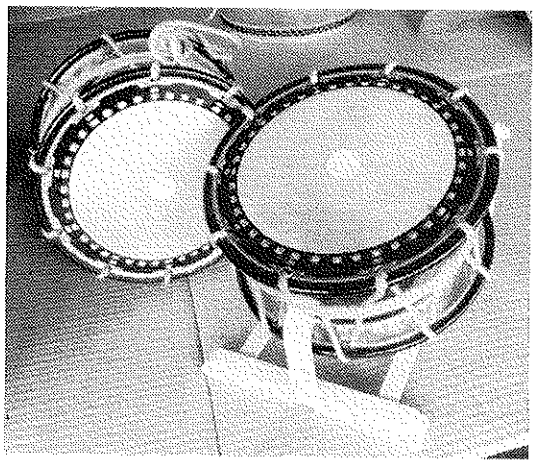
付け締め太鼓



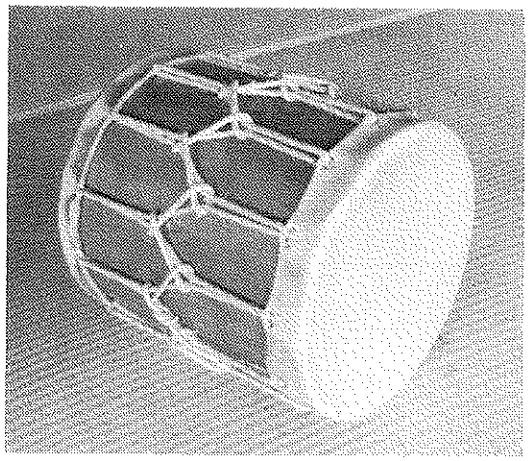
平　　太　　鼓



う　ち　わ　太　鼓

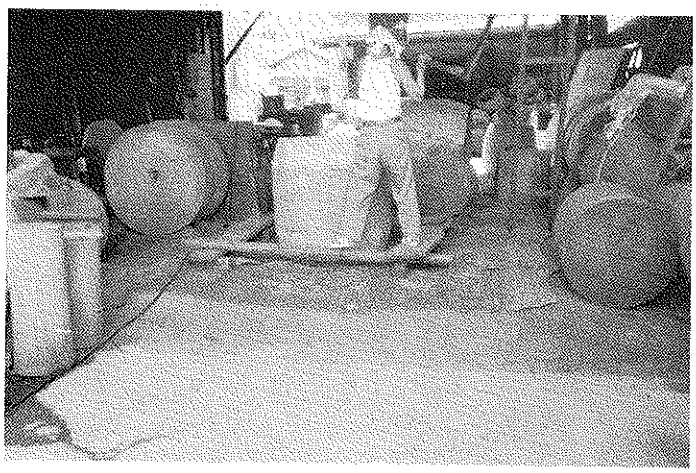


下　方　太　鼓

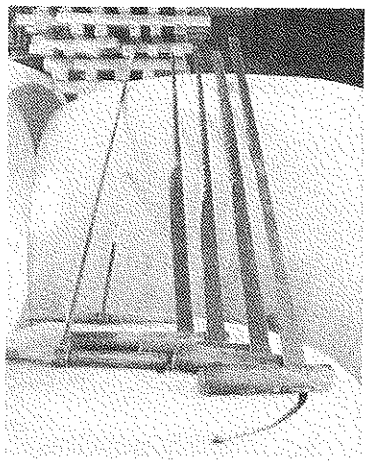


獅　子　太　鼓

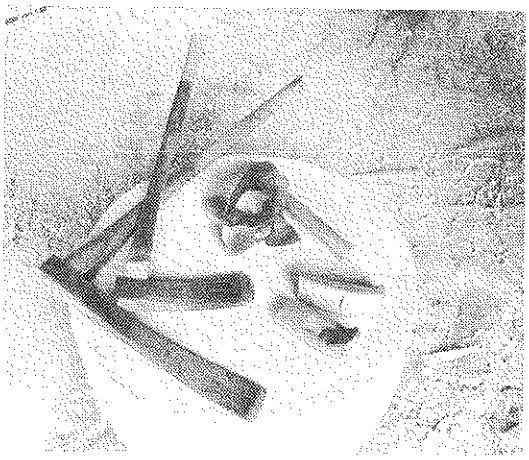
4．道　　具



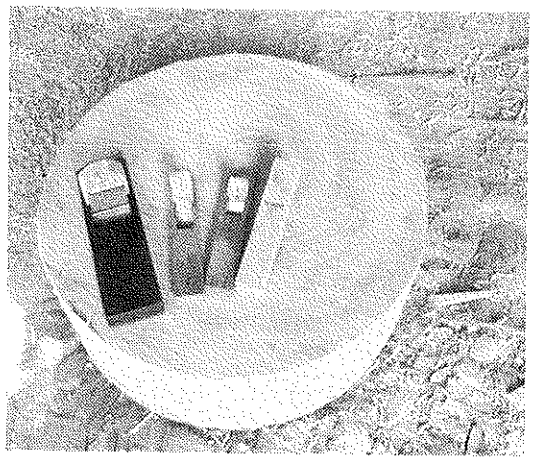
太鼓の胴部を製作する仕事場



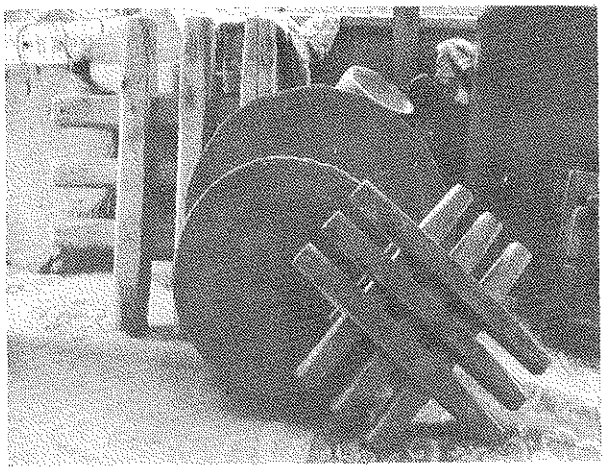
太鼓の内部をくりぬく
ボウトとノコギリ



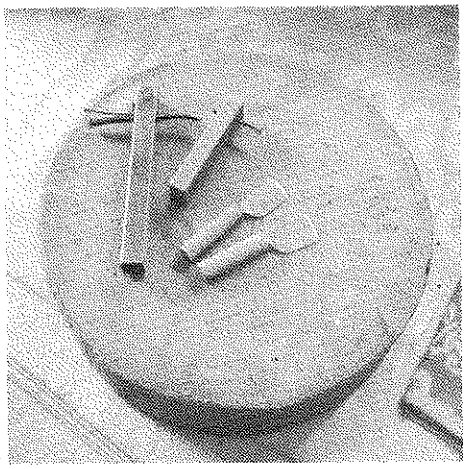
中彫り用のヨウキ・チョウナ・
マルカンナ



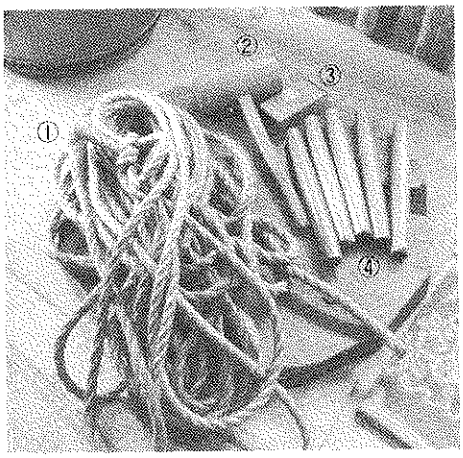
外仕上げ用のテカンナ



太鼓の皮張り台



太鼓の皮張り用のケヒキとミミキリ



① シメロープ

② キヅチ

③ サゲイタ（ブッツアゲ）

④ モジリ

太鼓の皮張り道具

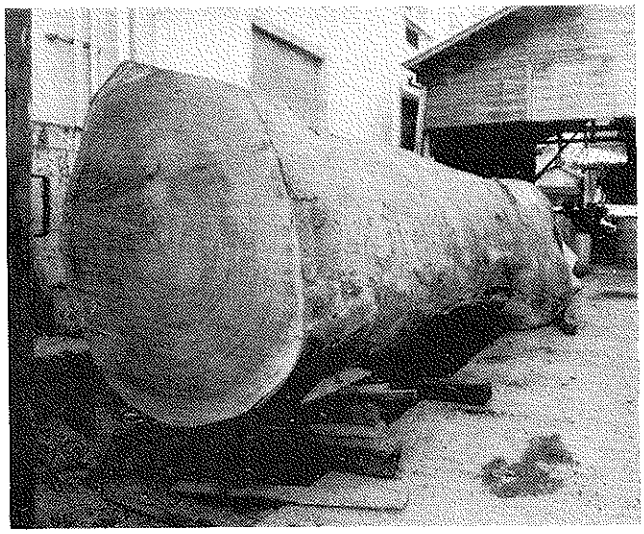
5．仕事の手順

(1) 原木の選定

太鼓の胴部になるケヤキは、大木を必要とするため最近はなかなか宇都宮周辺では入手困難になっている。

したがって、原木の買い付けは日本各地で行っている。

なお、原木は加工するまで半年くらいは乾燥させる必要がある。

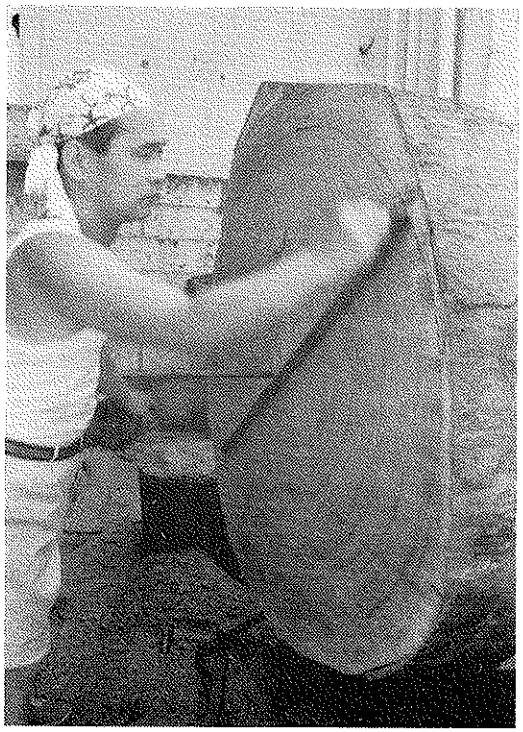


原木のケヤキ（樹齢約２５０年）

(2) 図面取り

原木を購入すると、その原木の大きさに応じた太鼓を作るための図面取りを行なう。

原木に書かれた図面

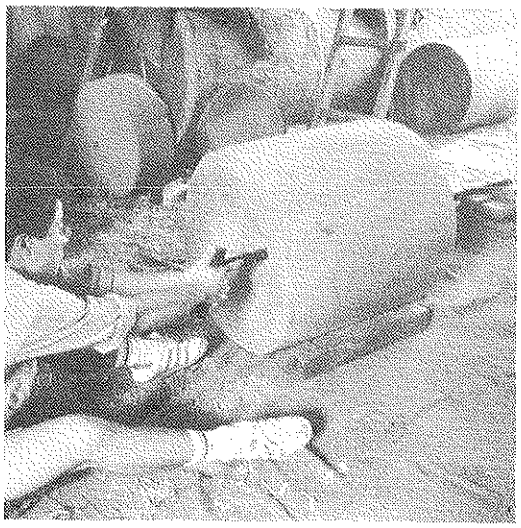


図面取りの様子

(3) 引きまわし

図面取りが終了すると、引きまわしといって太鼓の内部を切り取る作業を行なう。引きまわしは、ボウトで穴をあけ専用のノコギリで切り取り、内側は一周り小さな太鼓として使用される。

一部引きまわしをした状態

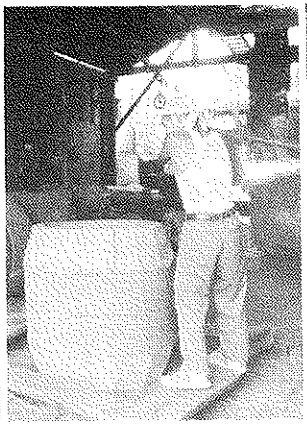


引きまわしの様子

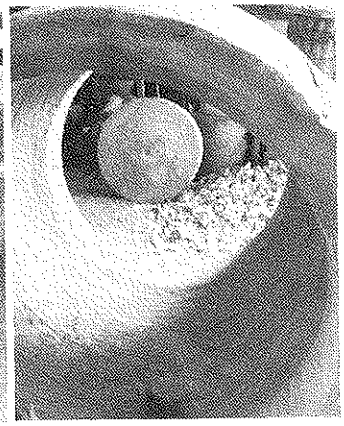
(4) 中彫り

引きまわしをした太鼓の胴部の内側をヨウキで弧状に堀り、チョウナで削りマルカンナで仕上げる。

中彫りの状態



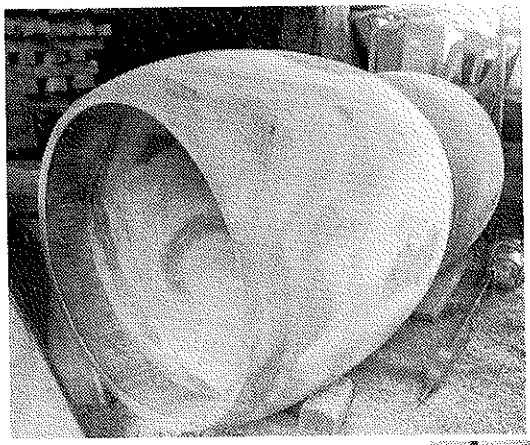
中彫りの様子



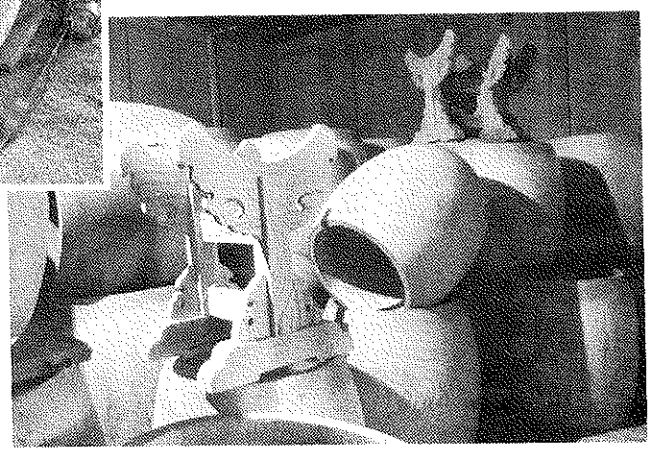
仕上げた状態

(5) 外仕上げ

中彫が終った胴部は、外側を仕上げてから2～3年蔵の中で乾燥させる。外仕上げは、荒削りをしテカンナをかけサンドペーパーをかける。



仕上げた状態



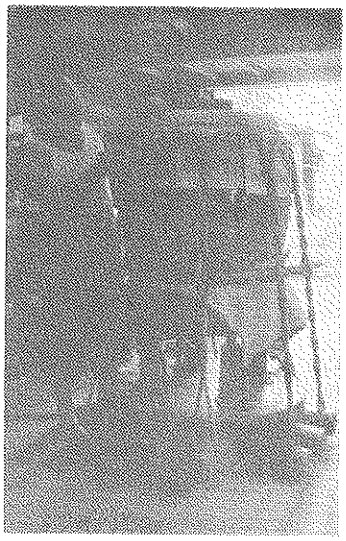
蔵入れの状態

(6) 皮張りと仕上げ

乾燥させた胴部の両面に皮を張り、塗料をぬり仕上げる。

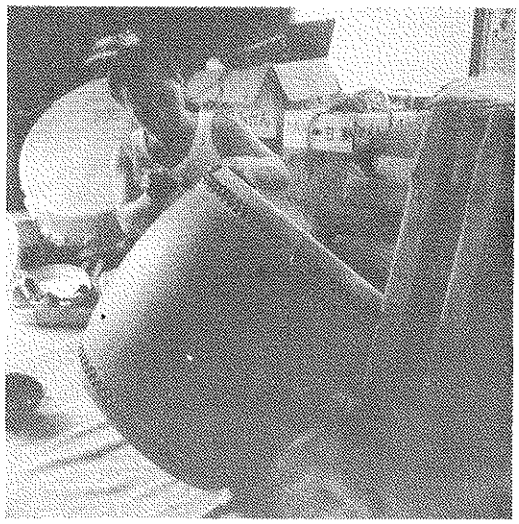
皮張り台のしくみ

皮しめる様子



鋲打ちの様子

みみ切りの様子



塗装の様子

2．黄ぶな作り

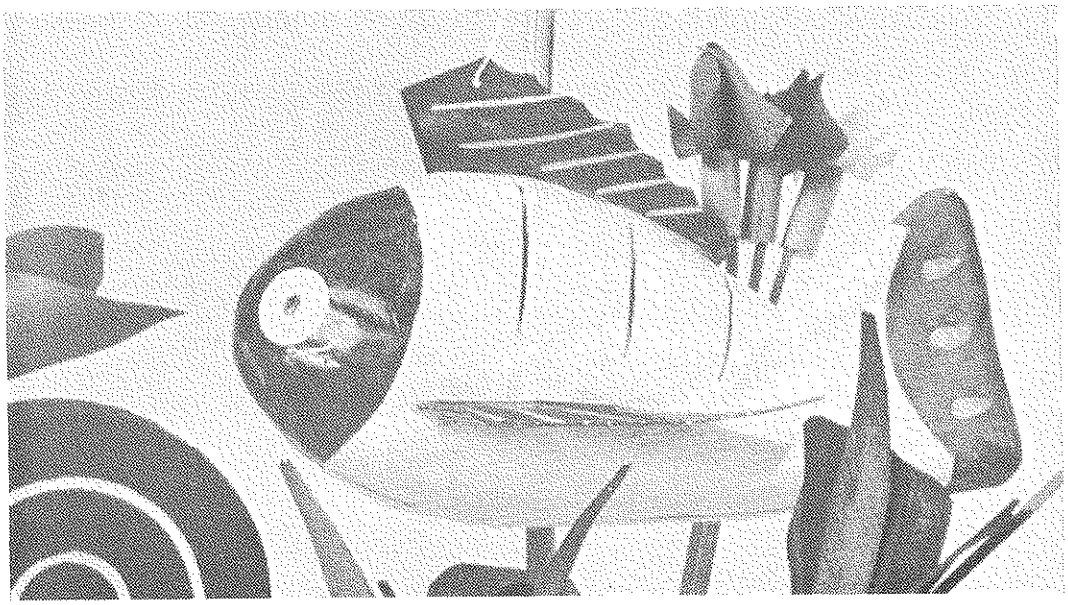
1．技術保持者　氏　　名　浅　川　仁太郎　　浅　川　俊　夫
　　住　　所　西原２－３－６　　同左
　　生年月日　明治39年１月30日　昭和20年12月25日

2．概　　要　技術保持者、浅川仁太郎氏は、50年以上黄ブナ作りを行なっており、現在、この技術は、仁太郎氏の次男俊夫氏が継承しているだけである。

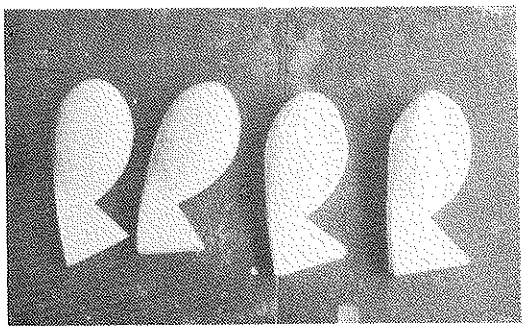
黄ブナは、マメダイコと共に元日に売り出された縁起物で、かつては新町の農家の副業として多くの人々によって作られていた。

現在、浅川氏は、黄ブナのほかマメダイコや初市で売り出されるワタバナ、アヤメの製作も行なっている。

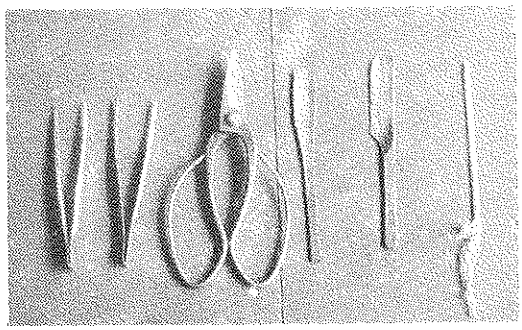
3．作　　品



4．道　　具



黄ブナの木型（左の２つ）

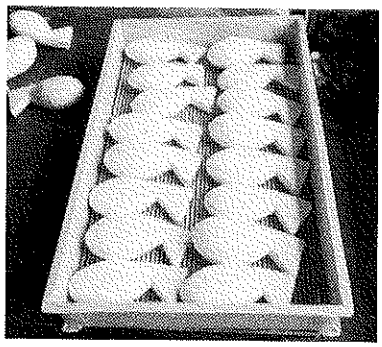


主な道具

5．仕事の手順

(1) 紙はりと乾燥

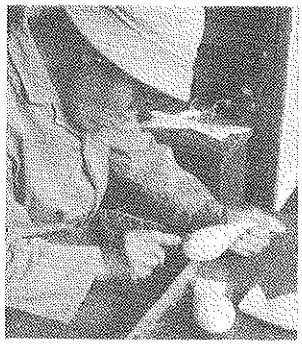
黄ブナの木型に和紙を張りつけ、1日半程度乾燥させる。



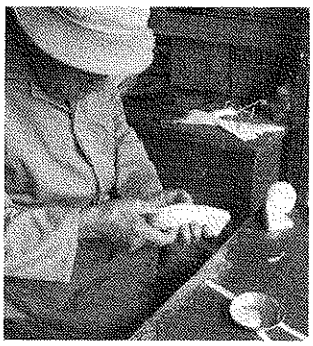
乾　燥

(2) 型の抜きとり

黄ブナの腹を切り、中の木型を抜き取り、切り口に紙を張る。



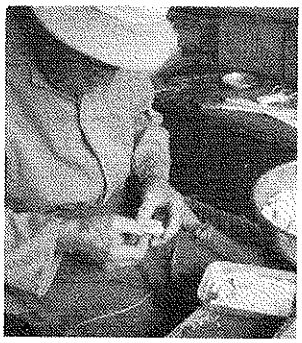
型の抜きとり



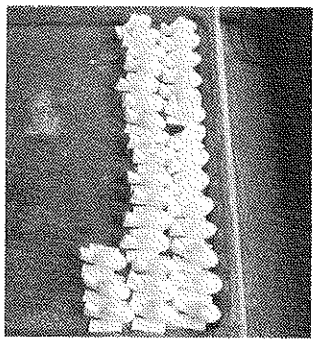
切り口に紙を張る

(3) ヒレ付けと乾燥

ニカワで黄ブナのヒレを付け、半日程度乾燥させた後、ヒレを整型する。



ヒレ付け

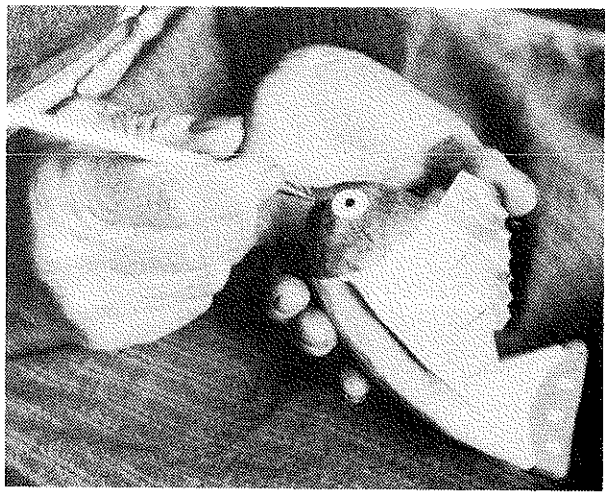


乾　燥

(4) 塗り

ヒレ付けが終わり、黄ブナとして型が整うと、ゴフンを塗り半日程度乾燥させる。

その後、赤・黄などの絵の具で着色し仕上げる。



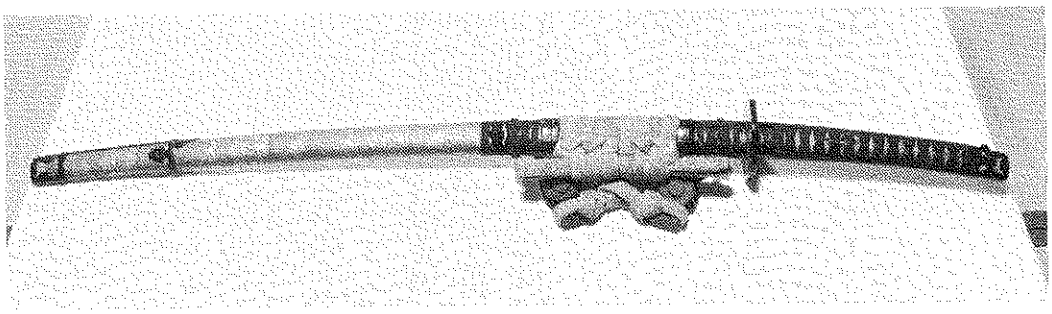
塗　り

3．刀剣拵（こしら）え

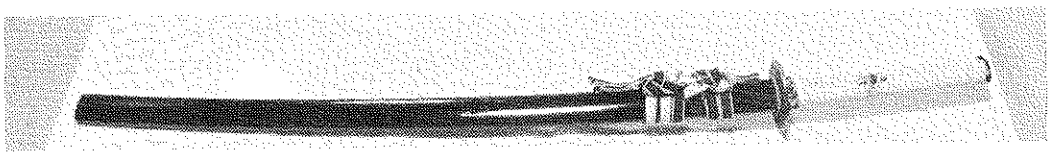
1．技術保持者　氏　　名　鷺谷義忠　　鷺谷政信
住　　所　伝馬町4－28　　同左
生年月日　明治41年2月4日　昭和20年3月1日

2．概　　要　技術保持者、鷺谷義忠氏は、水戸藩の御用鍛治であった鷺谷義種の6代目にあたり代々刀匠の家柄であったが、先代の義忠の時、宇都宮に移り住み（明治39年）作刀と共に刀剣類の外装拵えも業とするに至り、現在は、外装拵えと刀剣研磨を子息政信氏と共に行っている。

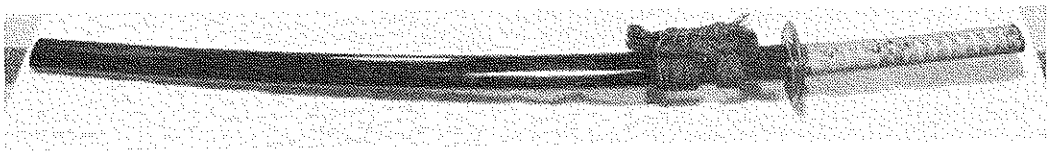
3．作　　品



太　刀

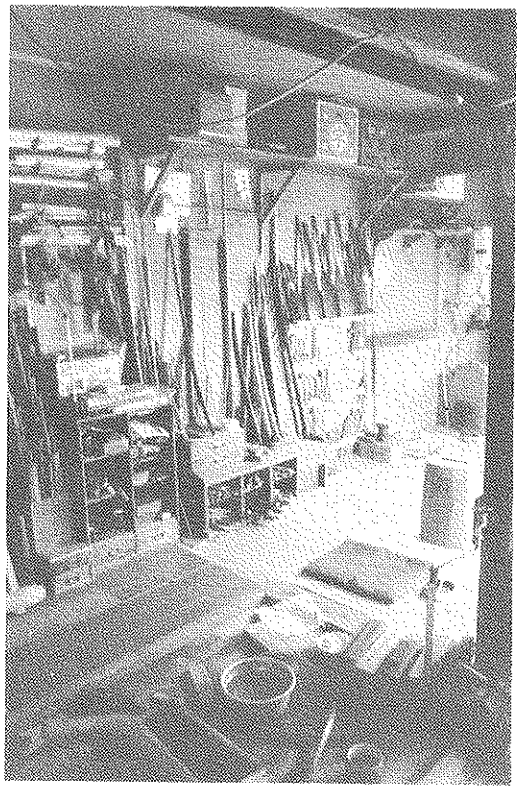


打　刀

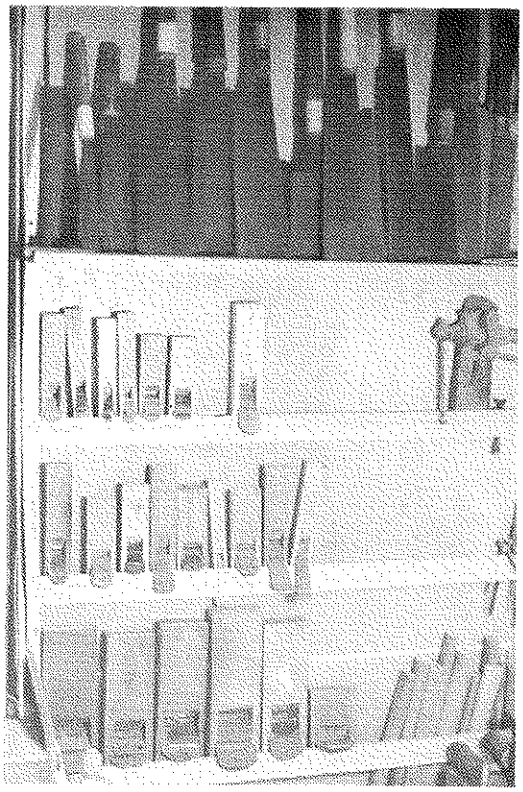


打　刀

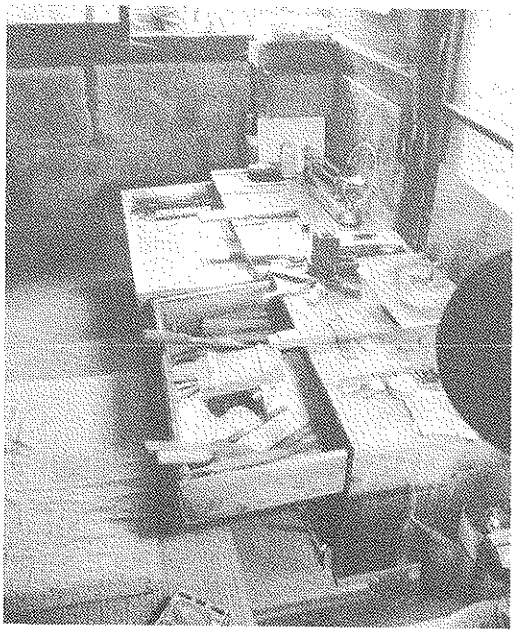
4．道　　具



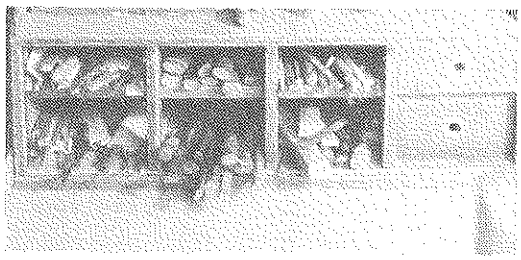
仕　事　場



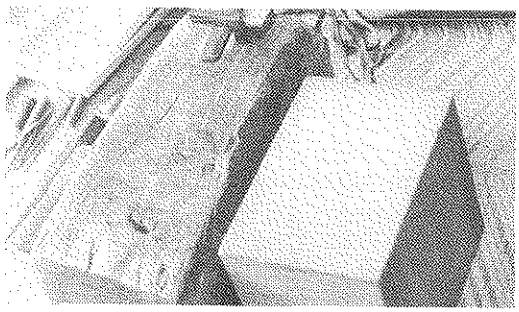
ノコギリとカンナ



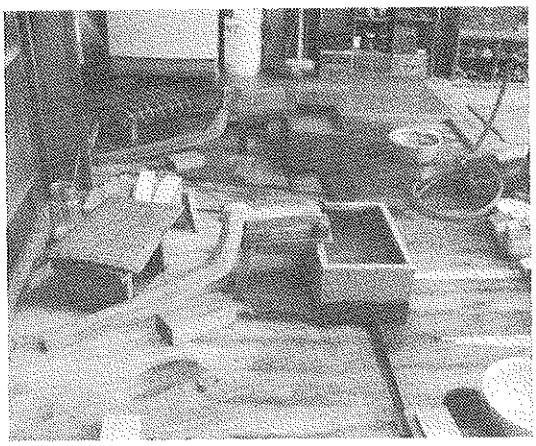
彫　金　台



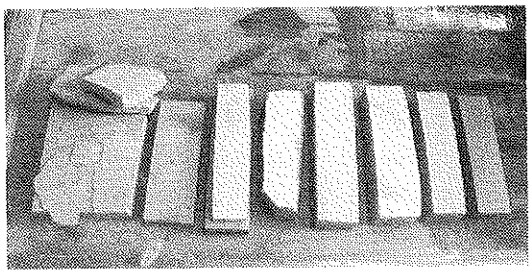
ヤ　ス　リ



細　工　台



研　磨　台

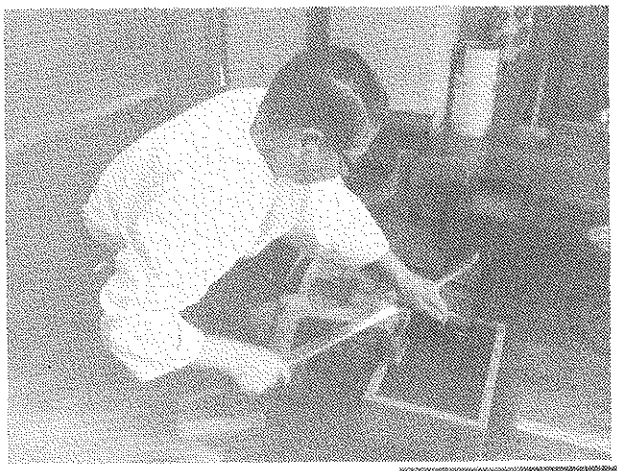


砥　　石

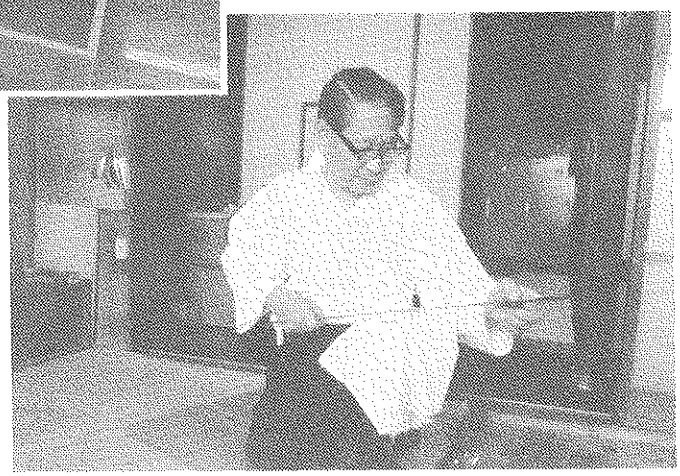
5．仕事の手順

(1)　刀身研磨

刀剣拵えの工程で、最初に行なう仕事は、刀身の研磨である。研磨は、各種の砥石を使用し慎重に実施される。



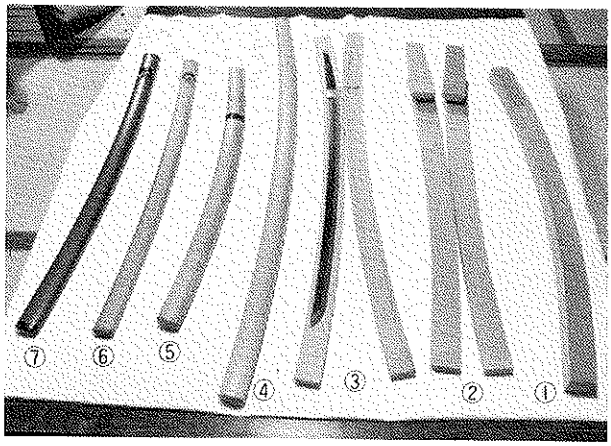
あら研ぎ



仕上げ研磨

(2) さや作り

さや及びつかを作る材料であるホウの木を、刀身にあわせて切り、それを2枚に割る。刀身の入る部分をくり抜き、次に接着し外部を削り仕上げる。



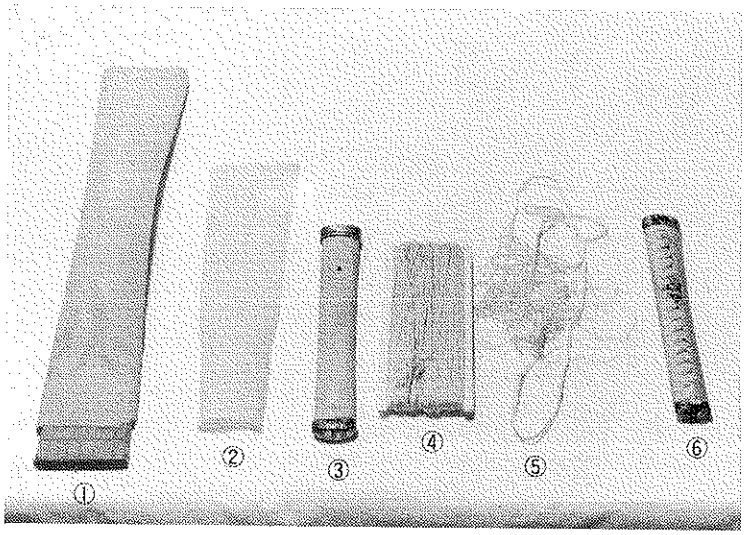
さやの仕上がるまで

①・② 木取り　③ 中彫り　④ 白さや（完成品）　⑤ 角口白さや（完成品）　⑥ 塗りさや下地　⑦ 塗りさや（完成品）

さや作りの様子(中彫り)

(3) つか作り

つかは、木の上にサメの皮をかぶせ、そこに皮ひもやじゃばらを巻きつけて仕上げる。



つかの仕上がるまで

① サメ皮

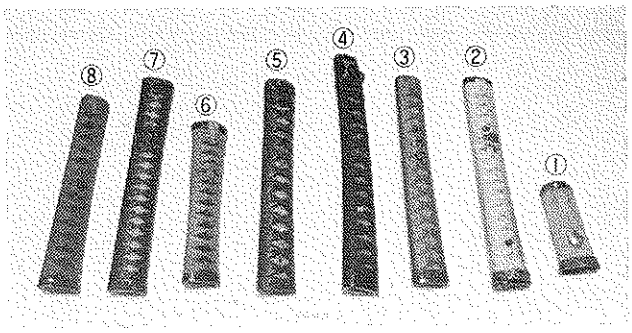
② サメ皮を切継した状態

③ サメきせ（サメ皮をつかに巻いた状態）

④ じゃばら糸

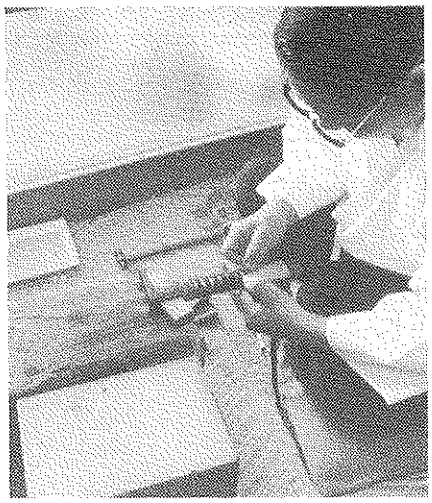
⑤ 糸作りをした状態

⑥ 巻き上がり



つかのいろいろ

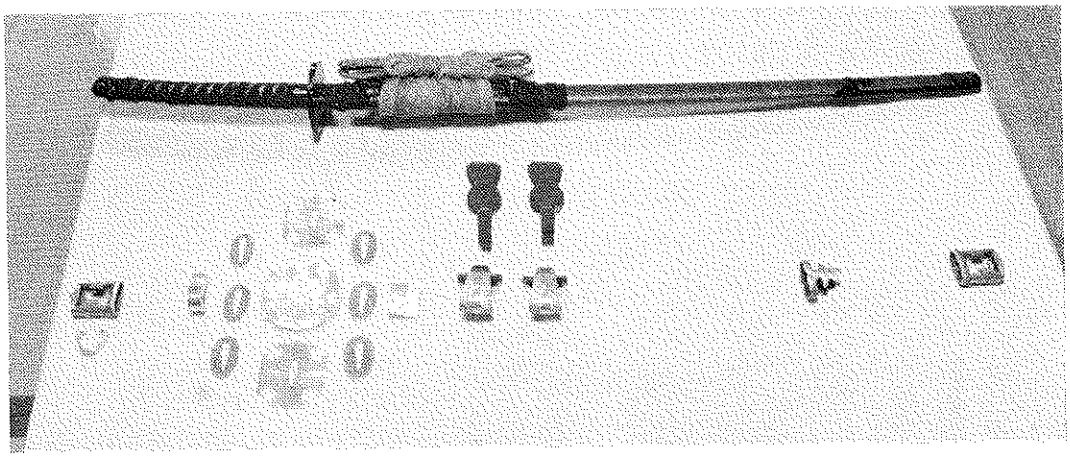
① 出しザメ　② じゃばら巻　③ 二本糸巻　④ 平　巻　⑤～⑧ 皮巻



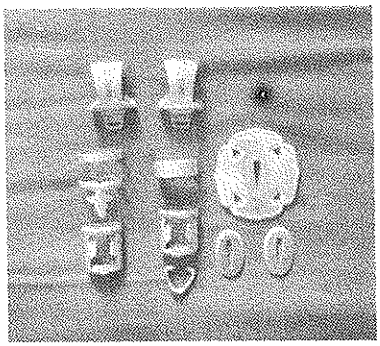
つか巻きの様子

(4) 金具作り

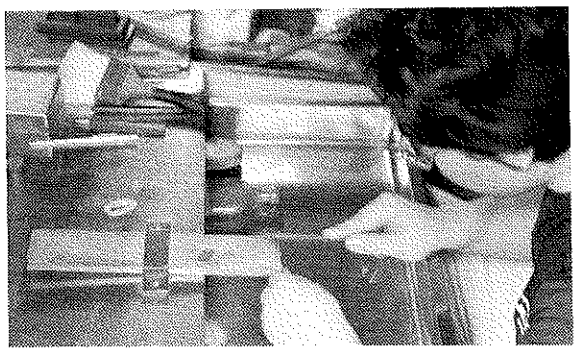
刀のつばやつかがしら等の金具は、彫金によって作られており、材料は、金・銀等が多く用いられている。



太刀金具 I



太刀金具 II



金具作りの様子

4．座敷箒（ほうき）作り

1．技術保持者

氏　　名	坂　本　泰　次	坂　本　久四郎
住　　所	桜５－４－17	同左
生年月日	昭和７年１月18日	明治35年４月28日
氏　　名	坂　本　アイ子	阿　部　龍次郎
住　　所	同上	下荒針町3581
生年月日	昭和６年３月27日	明治30年11月23日
氏　　名	佐　藤　行　雄	梅　沢　喜　夫
住　　所	上欠町677	下栗町2311
生年月日	大正８年３月22日	昭和16年５月19日
氏　　名	池　田　シ　ゲ	
住　　所	針ヶ谷町528	
生年月日	明治44年12月７日	

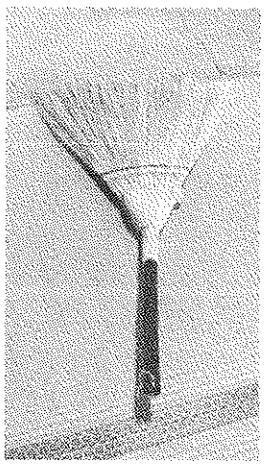
2．概　　要

栃木県の座敷箒作りの沿革は、定かではないが、江戸時代の初期にはじまったといわれている。

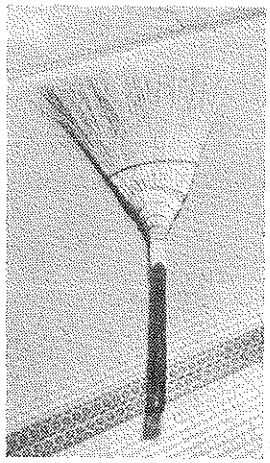
第２次世界大戦前には、市内にも多くの箒作りの技術保持者がおり、製品は、鹿沼箒と称して全国に販路をもっていた。

戦後は、箒の需要の減少にともなって技術保持者も減少の一途をたどっている。

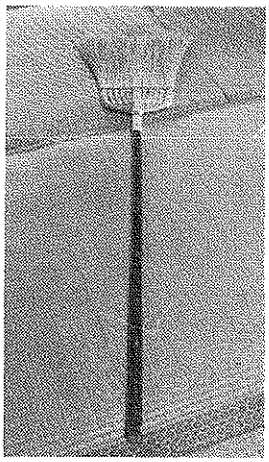
3．作　　品



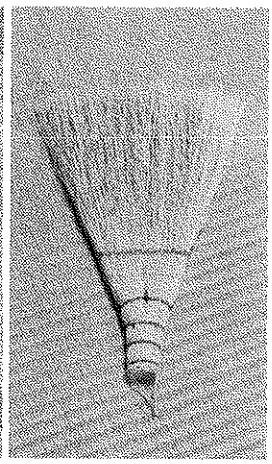
ハマグリ型箒



クビリ型箒

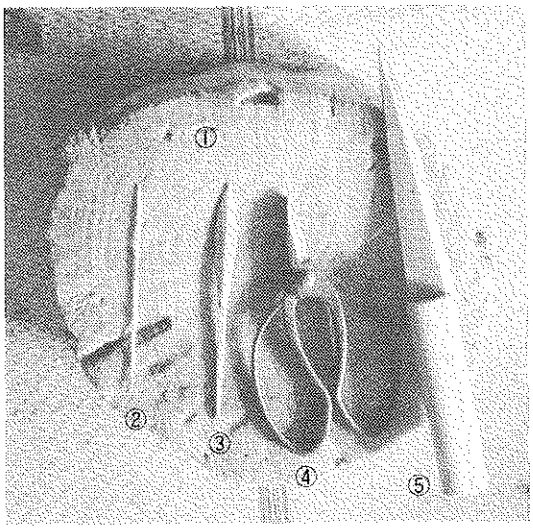


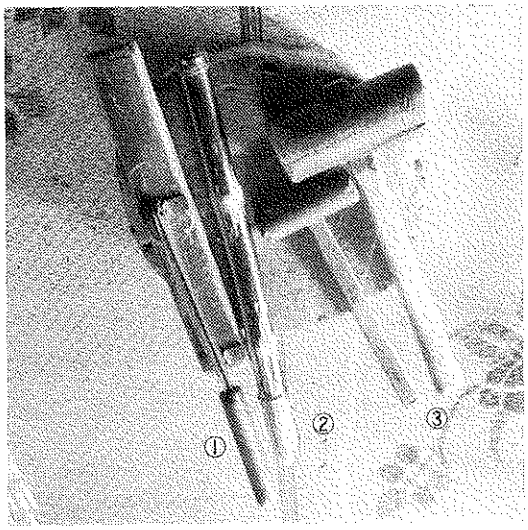
アズマ箒（長柄）



チャ箒（ブラシ）

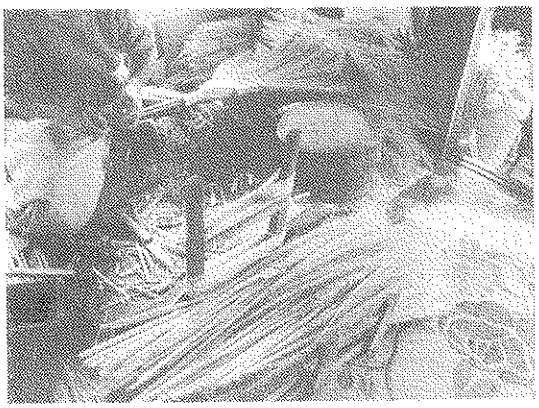
4．道　　具





① ハタキダイ　② トジバリ　③ カラサキ　④ キバサミ　⑤ コガタナ

① オシキリ　② トジバサミ　③ キヅチ



作業の様子

箒の製作は、すべて「ユイ台」と呼ばれる作業台の上に座って行なわれる。

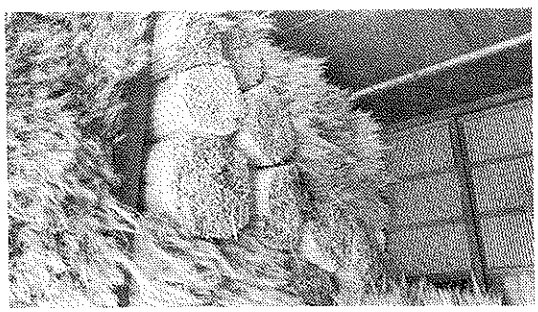
したがって、製作過程で使用する道具は、作業台の周辺、それも座ったままで手の届く位置においている。

5．仕事の手順

(1) 原料の収集

座敷箒の原料は、箒モロコシであり、鹿沼周辺の農家から秋口に買い入れる。

なお、箒の製作にかかる前、箒モロコシを5時間程度水にひたしておく。

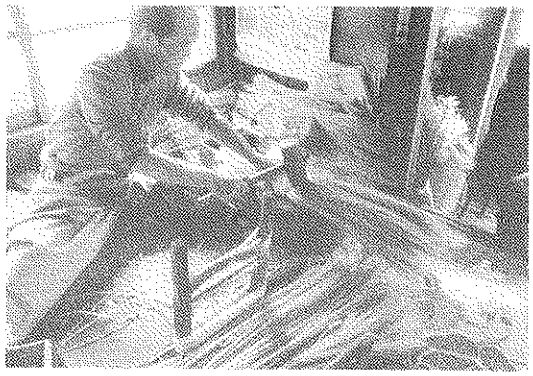


棚に積み上げられ箒モロコシ

(2) 穂づけ

箒モロコシをたばね、縫ったあと整形する。

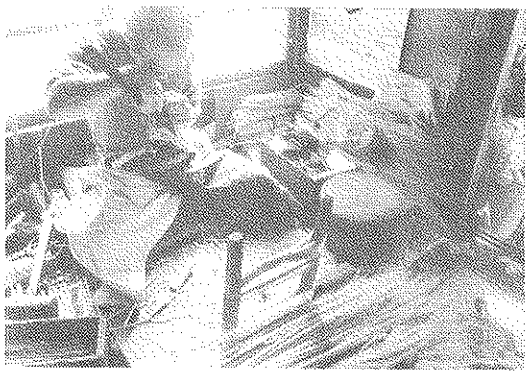
穂　づ　け



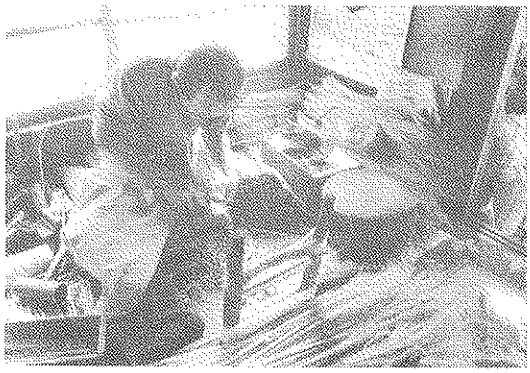
整　　形

(3) 柄つけ（エボッコミ）

竹の柄を取りつけ、つけねの部分を小刀で整形する。



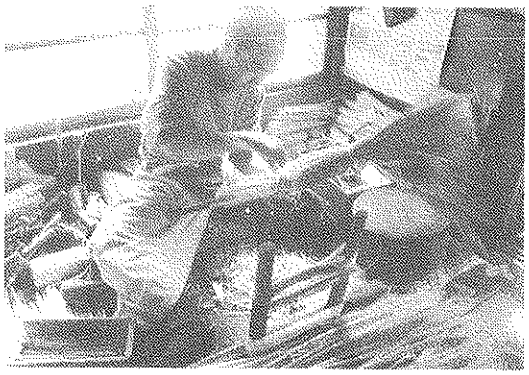
柄の取りつけ



整　　形

(4) 編みあげ（トッツアゲ・アミオロシ）

ハマグリ部分を編みあげる。

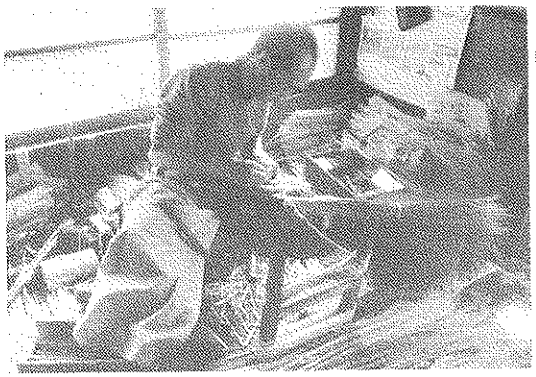


編みあげ（始まり）

編みあげ（終わり）

(5) 藤づる巻き（現在はビニール製のつる）

柄の取りつけ部分に藤つるを巻き、竹釘でとめる。

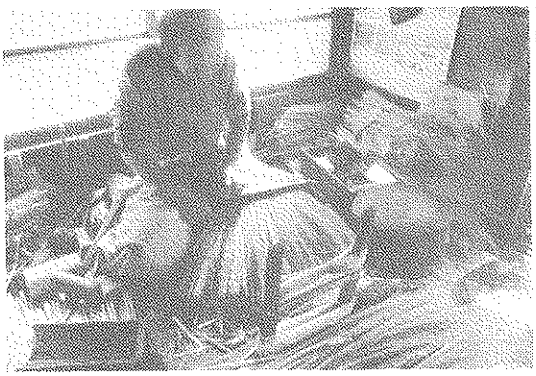


藤つる巻き（終わり）

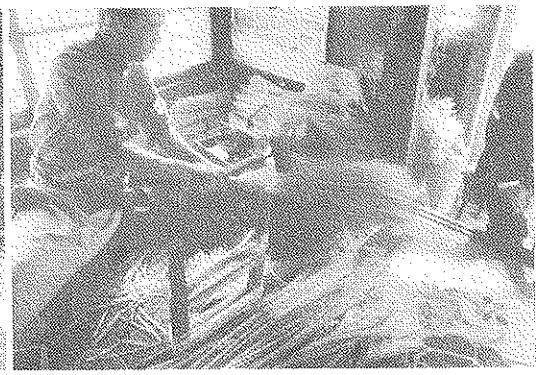
竹釘でとめる

(6) カケ糸縫い

トジバサミを使い、整形しながらカケ糸で縫う。



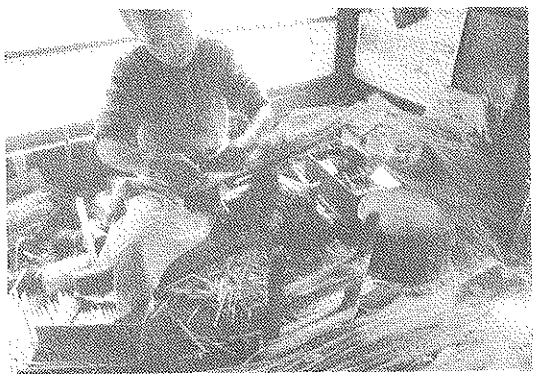
カケ糸縫い



整形

(7) 仕上げ

カケ糸縫いが終ると、穂先きを整形し仕上げる。



穂先の整形

仕上がり

5．藁（わら）　細　工

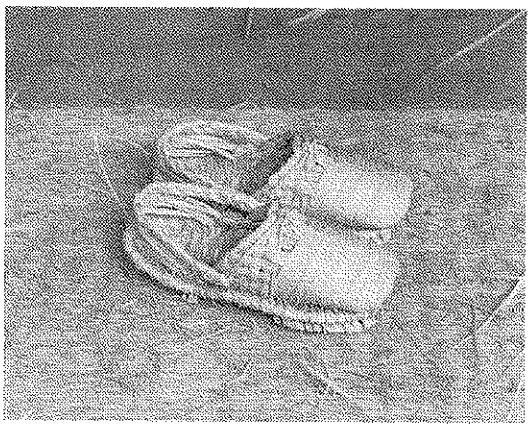
1．技術保持者　氏　　名　五十嵐　一　佐
　　住　　所　瓦谷町６３７
　　生年月日　明治41年11月11日

2．概　　要　　技術保持者五十嵐氏は、青年になるまで生活をした福島県南会津郡南郷村で、藁細工の技術を修得した。

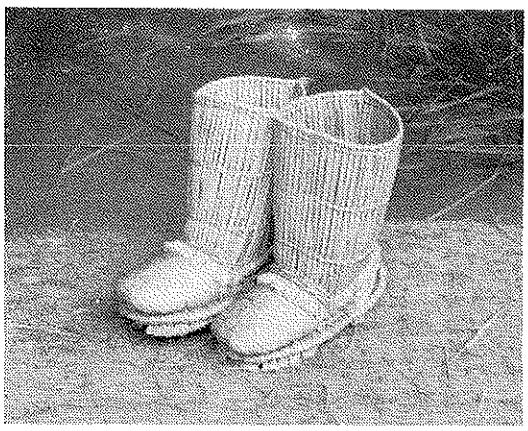
　宇都宮市に移り住むようになってからも、その技術を生かし農作業等に必要な実用的藁加工品を製作していたが、最近は、注文に応じて鑑賞用の藁グツ、藁ゾウリ等を作っている。

3．作　　品

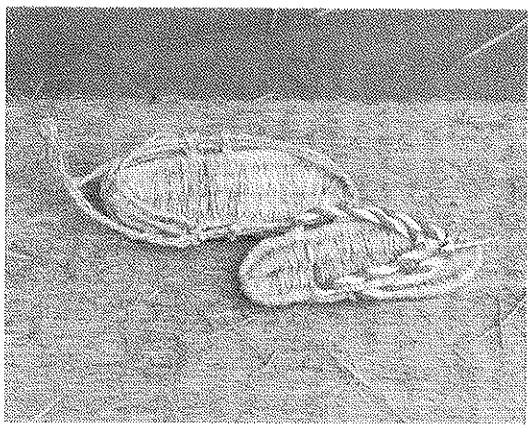
イ　チ　コ



ワ　ラ　グ　ツ

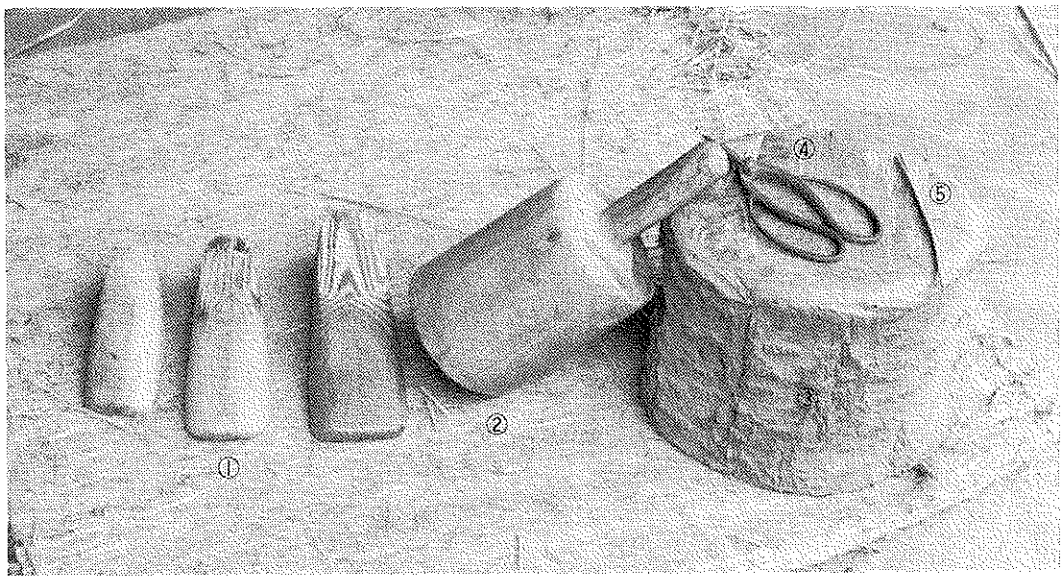


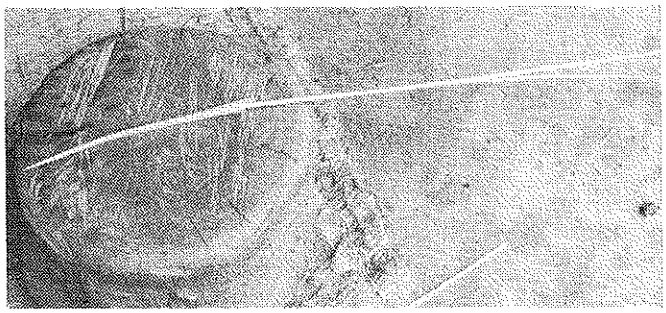
ワ　ラ　ナ　ガ　グ　ツ



ワラジとワラゾウリ

4．道　　具





ツバグシに藁をはさんだ状態

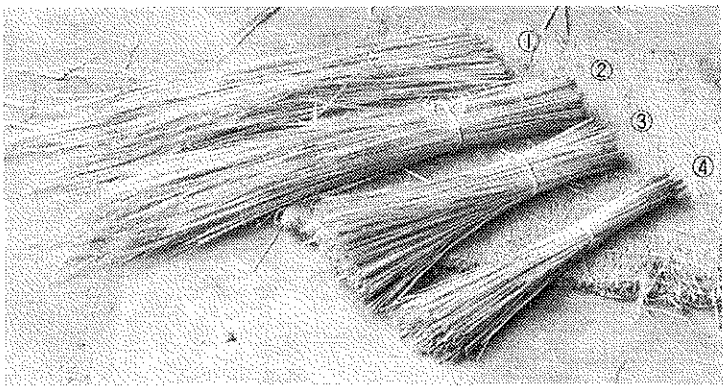
① キガタ
　ワラグツやワラナガグツを作る時使用
② ツチンボ
　ワラブチの杵
③ ワラブチダイ
④ キバサミ
⑤ ツバグシ
　ワラを通す時使用

5．仕事の手順

(1) 材料になる藁を集める

手で刈り取った藁を３日程度地面の上に干し（地干（じほし））、藁細工用の材料とする。藁の質で、作品の良否が決定するので慎重に取り扱った。

現在、作付けされている稲の品種では「日本晴」が良質の藁が取れる。

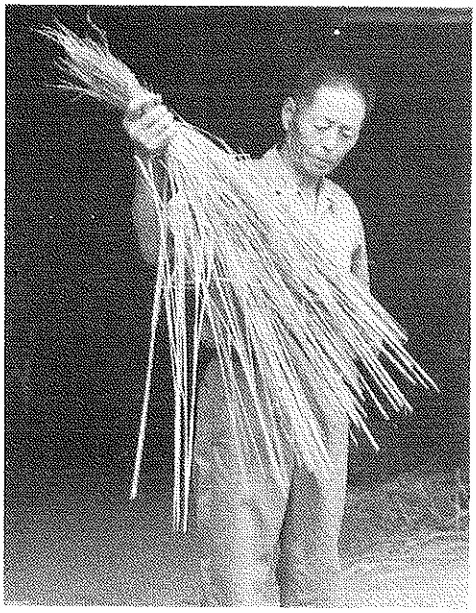


① 地干後の藁
② ①からシビを取った藁
③ ②からヒロった藁
④ ③からヒロった藁

注）③と④は、イチコ用に穂先を切断した藁

(2) 藁のシビを取る

地干した藁を家に持ち帰り、シビ（ハカマ）を手で取り除く。



(3) 細工用の藁をヒロう

シビを取った藁から細工に適する上質の藁をヒロう（選びだす。）

この作業は、2回は行ない一度ヒロった藁から再度ヒロイ藁を厳選する。

(4) 藁ブチをする

ヒロった藁をワラブチダイにのせ、ツチンボでよくたたく。

(5) 製作にかかる

材料になる藁ができあがると製作をはじめる。

作品完成までには、イチコとワラナガグツが1日半、ワラグツが1日、ワラジとワラゾウリが半日かかる。

注）　写真はイチコづくりの様子

6．ふくべ細工

1．技術保持者

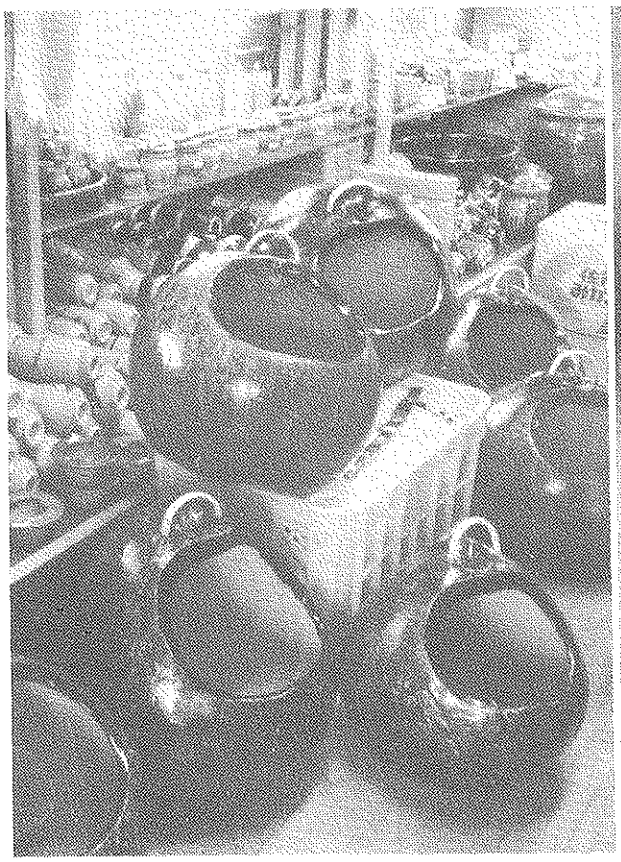
氏　　名	岡　田　三代造	福　田　太　郎
住　　所	簗瀬町５１３	大通り３－４－10
生年月日	明治40年８月５日	大正２年２月29日
氏　　名	小　川　昌　信	小　森　　明
住　　所	大通り２－４－８	大通り３－２－３
生年月日	昭和17年７月15日	大正９年10月11日

2．概　　要

種取り用カンピョウを加工する「ふくべ細工」は、大正初期からはじまったといわれている。

はじめは、口だけを切った簡単な炭入れだけであったが、炭の需要が減少すると共に炭入れのほかに魔除け面などの掛け物等も作られるようになっている。

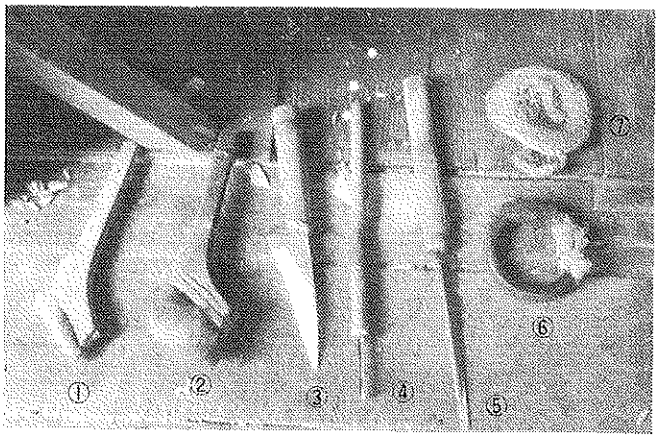
3．作　　品



炭　入　れ

面

4．道　　具



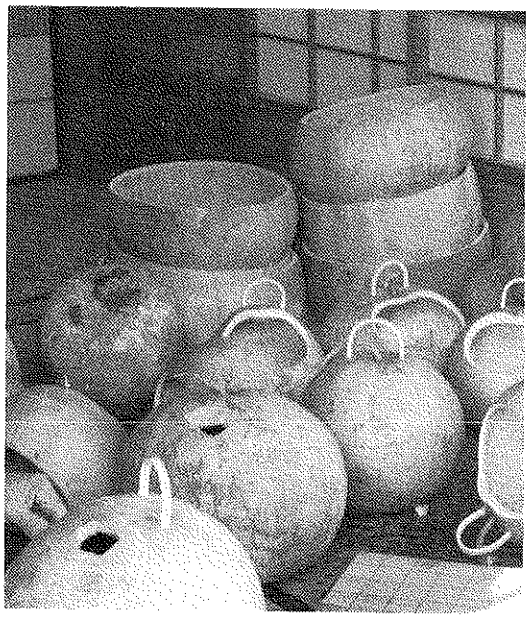
① 上塗り用ハケ
② ごふん用ハケ
③ 出刃ボウチョウ
④ キリ
⑤ まわしノコギリ
⑥ 中ザライ
⑦ 金ダワシ

5．仕事の手順

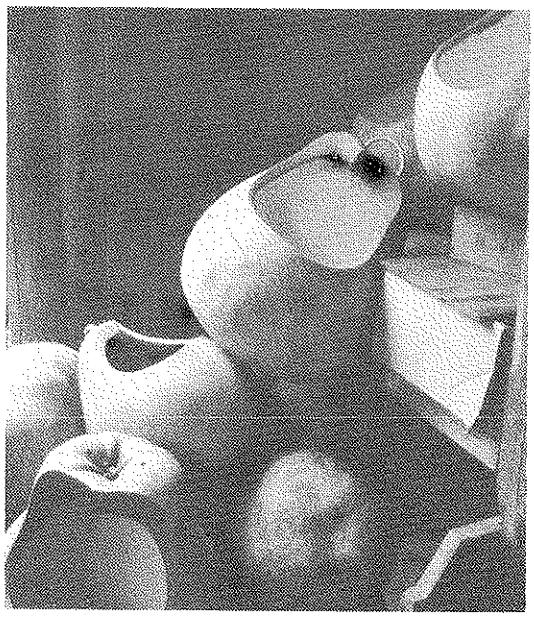
(1) 材料になるフクベを集める

種取り用の元なりカンピョウを、石橋・壬生・上三川・真岡地区の農家から買い付ける。

集まったカンピョウは、汚れているので、細工にかかる前に水できれいに洗い、20分程度乾燥する。これを「タマアライ」という。



タマアライ後のフクベ

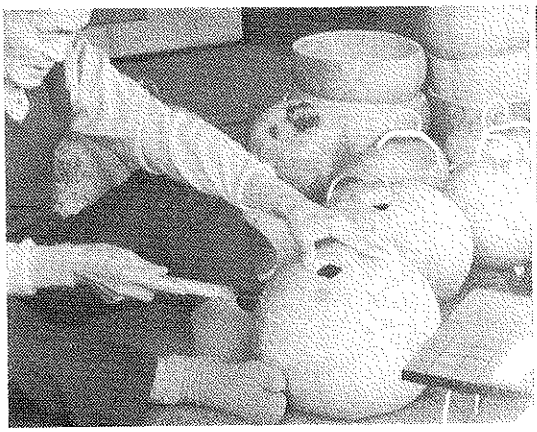


倉庫のフクベ

(2) 手の取り付け

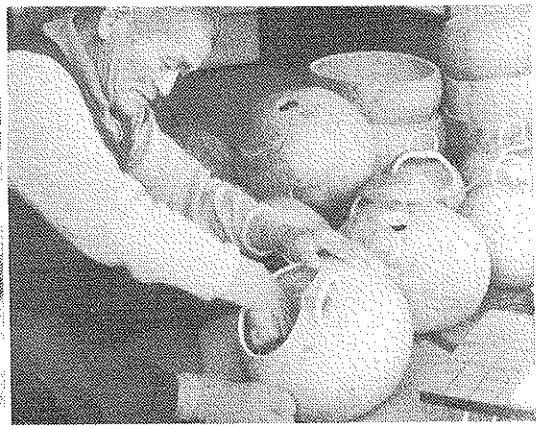
(3) 口の切り取り

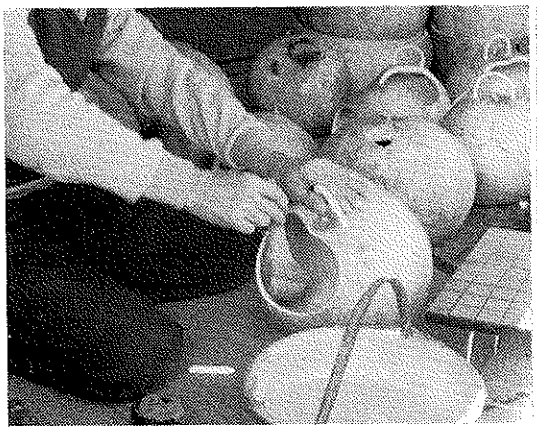
足でフクベをおさえ、ノコギリで口を切り取り、出刃ボウチョウで整形する。



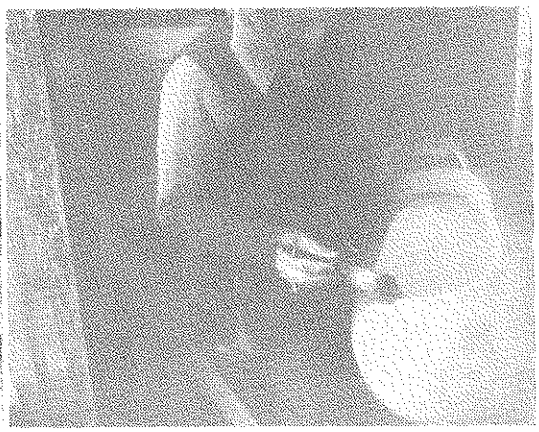
(4) 中をさらう

フクベの内側を、平らにするため、中ざらいをする。





内側を塗る



口を塗る

7．竹　細　工

1．技術保持者　氏　　名　斉　木　正一郎　　斉　木　　董
住　　所　東塙田１－１－９　同左
生年月日　大正３年10月15日　昭和19年12月19日

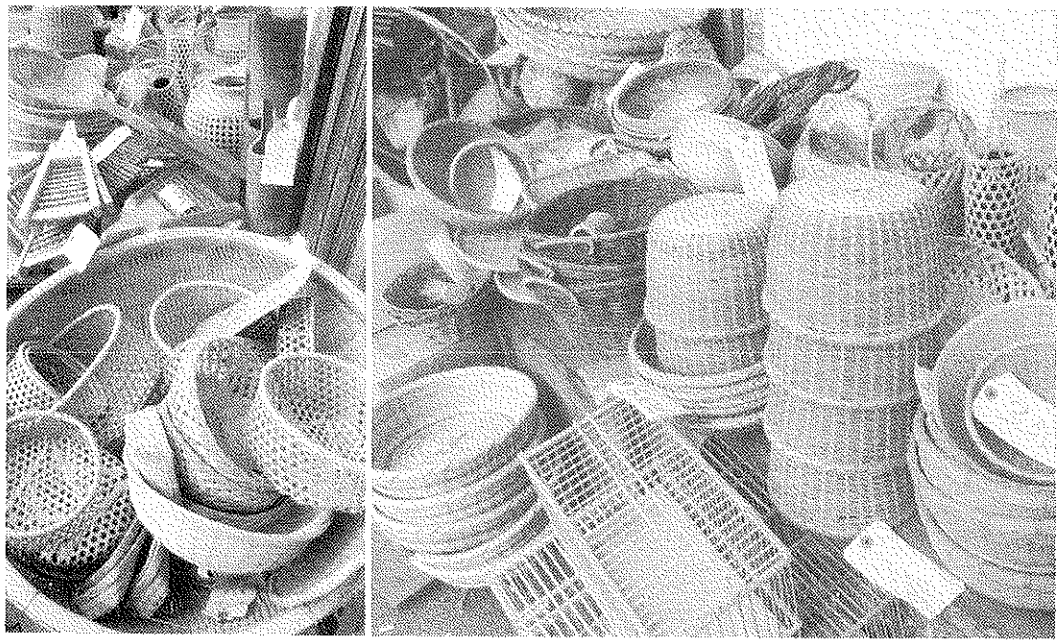
氏　　名　見　目　圭　章　　小　堀　金　重
住　　所　今泉町８２０　　関堀町３６３
生年月日　大正８年７月13日　明治39年３月10日

2．概　　要　近年、竹製品は、プラスチック製品に市場を占有され竹細工の技術保持者は減少の一途をたどっている。

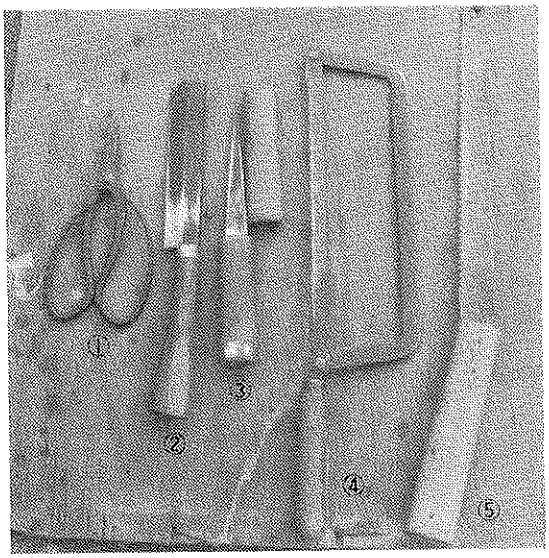
第２次世界大戦前、約50軒ほどあった竹製品製造販売店も今では２、３軒になってしまった。

現在、技術保持者の多くは、戦前、旧新宿町に店舗を構えていたカゴ店「武蔵屋」で技術を修得した人やその技術の流れをくむ人が多いようである。

3．作　　品



4．道　　具

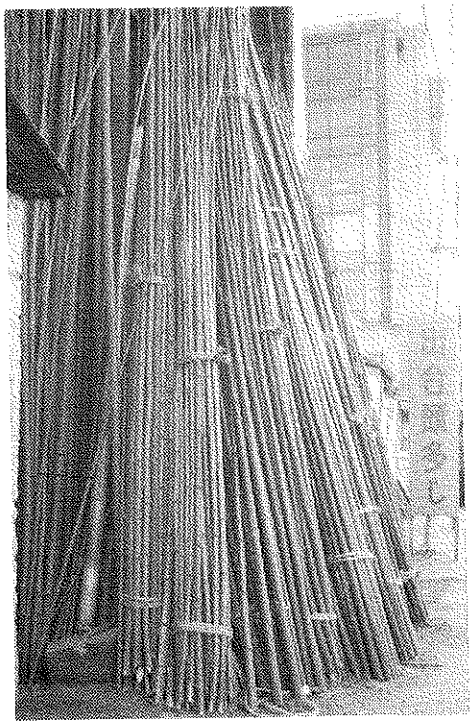


① 細工用ハサミ
② 竹割り用ナタ
③ 細工用キリダシ
④ 細工用ノコギリ
⑤ 竹切り用ノコギリ

5．仕事の手順

(1) 材料になる竹を集める

竹細工の真竹を仕入れる。
真竹は、国本地区の新里産が最上とされている。



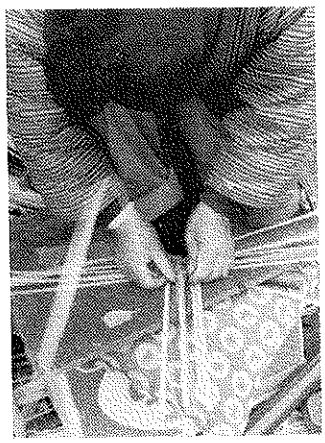
細工用の真竹

(2) 竹割り

竹をアラヌカ（ワラ）でよく磨き細工する物にあわせて割る。

(3) 底編み

ザルの底を編む。
（写真はアジロ底）



(4) **七廻し**(底廻し)

底の部分に細い竹を7度廻し、さらに上部へ巻きあげる。

(5) **腰上げ**(胴編み)

ザルの胴部を編みあげる。

(6) **折り曲げ**

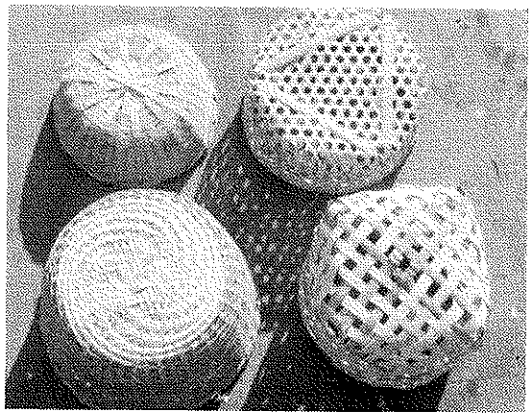
胴部の巻きあげが終ると、骨の構成する竹を折り曲げ、余分な部分を切り取る。

(7) **ふち巻き**

外側(外ぶち)及び内側(中ぶち)に竹を入れ、ふちを巻く。

(8) **完成品**(底の種類)

クモノス(上左)ムツメ(上右)
アジロ　(下左)ヨツメ(上左)

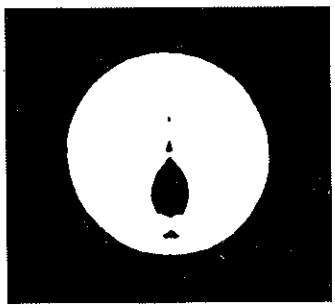


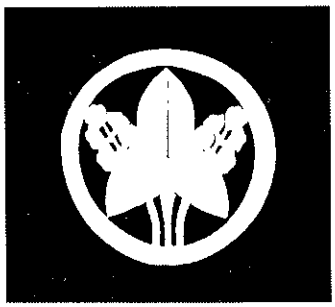
8．か　き　紋

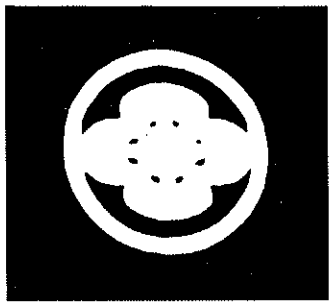
1．技術保持者　氏　　名　日下田　席　蔵
住　　所　西１－２－３
生年月日　明治40年８月15日

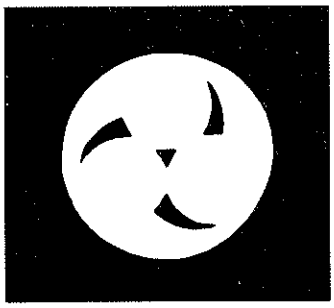
2．概　　要　技術保持者、日下田氏は、大正11年（15才）から９年間東京で修業し、かき紋の技術を修得した。
かき紋の他に、略式の紋である縫い紋及び和服のしみ抜きに関する高度な技術も保持している。

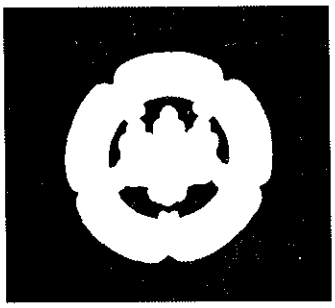
3．作　　品

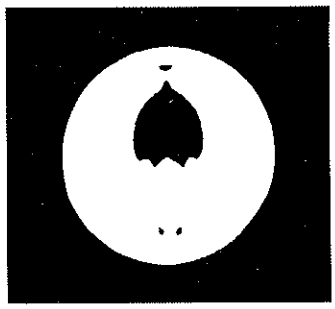

だきみょうが
丸に抱茗荷

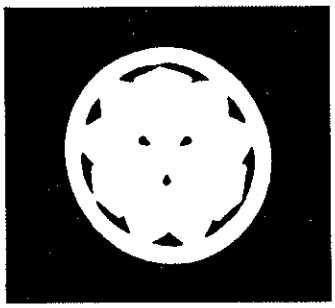

たちおもだか
丸に立沢瀉

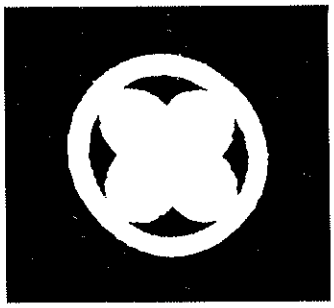

よこもっこう
丸に横木瓜


みつがしらみぎどもえ
三つ頭右巴


ごかごさんきり
五窠に五三の桐

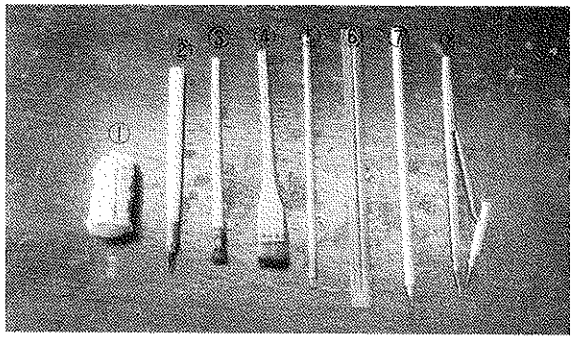

のぼりふじ
丸に上り藤

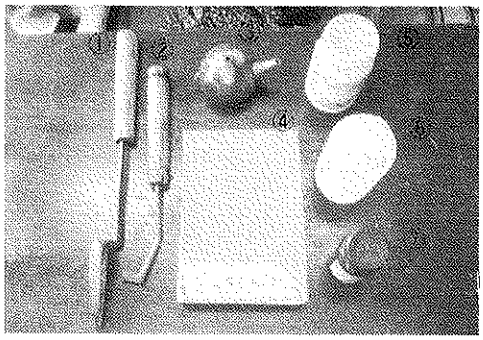

けんかたばみ
丸に剣鳩酸草


ちがいたかのは
丸に違鷹羽

いなお
丸に稲穂

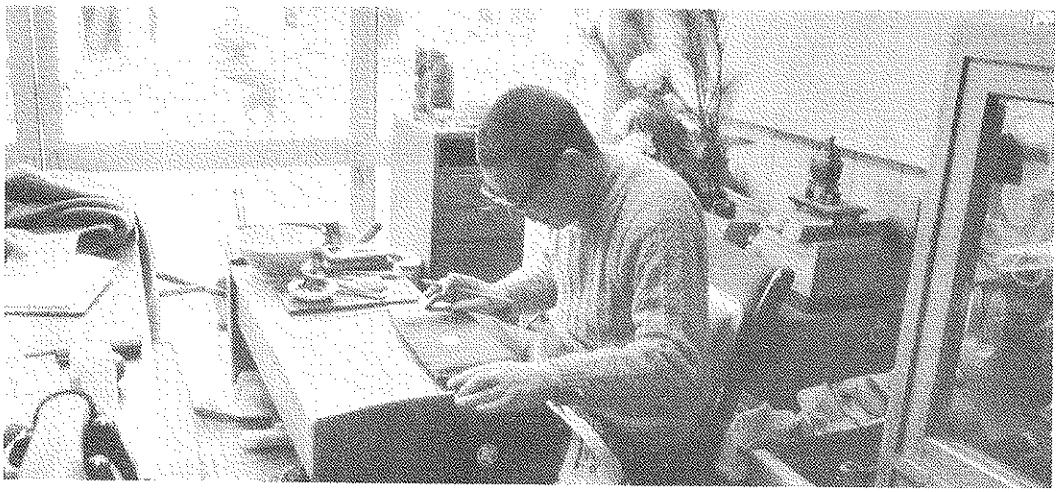
4．道　　具





①　サイクロウ　②　コガタナ　③　スリコミバケ　④　ボカシバケ　⑤　ヒキボウ　⑥　モノサシ　⑦　フデ　⑧　ブンマワシ

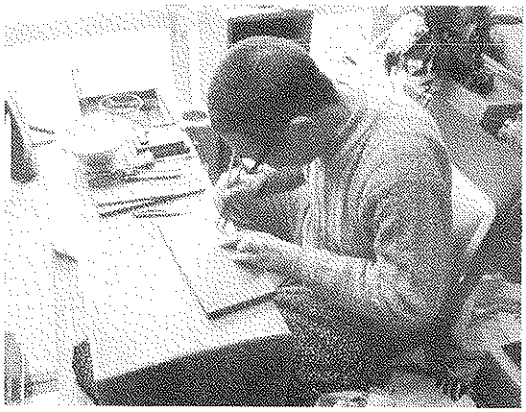
①　ヤナギゴテ　②　マルゴテ　③　ミズイレ　④　エドモンショウシュウ　⑤　ノリ　⑥　ボウスイエキ　⑦　クロエキ

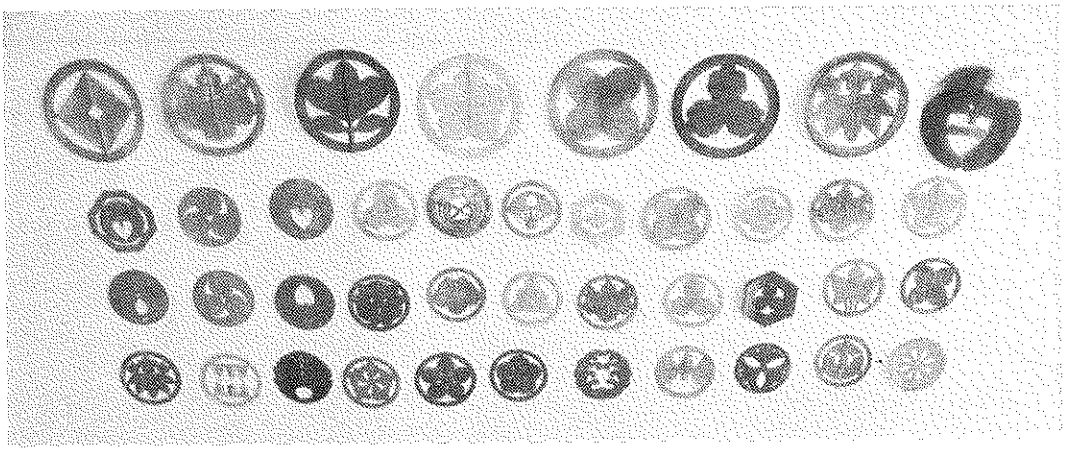


仕　事　場

5．仕事の手順

(1)　型作り（型おこし）





紋の型紙

(2) すり込み

(3) しべがき

(4) ぶん廻し

あ と が き

文化財シリーズ第３号として「宇都宮の手仕事」を発刊する運びとなりました。

今回は、郷土に残る手仕事のうち「太鼓」・「黄ぶな」・「刀剣拵え」・「座敷箒」・「藁細工」・「ふくべ」・「竹細工」・「紋」の８種についてのみ収録しております。

今後、さらに広範囲にわたって調査を進め、本冊子の続編を刊行したいと考えています。

本冊子により、宇都宮で現在続けられている伝統的な手仕事の一部を紹介いたしましたが、読者の皆様の郷土に対する認識を深めていただく一助となれば、編集に携わった者として、喜びに堪えません。

なお、文化財シリーズ第４号は、「宇都宮の石碑」を発刊する予定です。

昭和55年３月

編集責任者
宇都宮市教育委員会
社会教育課長　半　田　　昭

昭和55年3月20日　印　刷
昭和55年3月25日　発　行

宇都宮の手仕事

発行所　宇都宮市教育委員会
監　修　栃木県立郷土資料館
　　館　長　　尾島利雄

編　集　宇都宮市教育委員会社会教育課
印刷所　㈲　イリサワ商事

（表紙題字・桜井敬朔）

文化財愛護
シンボルマーク

文化財シリーズ第3号